

書物という魔法

図書館長 廣瀬 玲子

あたりまえのことですが、わたしたちは生きている人として話をすることができません。また、自分に理解できる言語でしか人と話をすることができません。

でも、本はちがいます。図書館にある本の著者、詩や文章の書き手の多くは、すでにこの世にいない。にもかかわらず、本を読むことで、わたしたちは、その人たちと対話することができます。読書とは、静かに眠っている本を開いて、死者の言葉をよみがえらせることだといえるかもしれません。

さらに、図書館にある本のなかには外国語から翻訳されたものがたくさんあります。日本語の背後に隠れている翻訳者のおかげで、わたしたちは自分が話すことも読むこともできない言語で書かれた言葉を、日本語で読み、理解することができるのです。

この二つが、書物という魔法であり、その結晶ともいえるのが「古典」と呼ばれる本の数々です。大学ではぜひ、長い時を経て伝わってきた書物、はるかな土地から旅をしてきた古典に触れてみてください。遠い昔の人が詠んだ歌がなぜこんなに胸を打つのか、知らない国の人思索になぜこんなに共感できるのか。きっと不思議に思うことでしょう。

とはいっても一方で、よくわからないところもあるはずですが。古典が今に伝わっているのは、むしろわからないことがあるから、と言ってもいいでしょう。わからないけれど気になってついまた手にしてしまう、時間をかけて、少しずつ親しんでいく——少しずつ仲よくなる友人のように。本のなかの言葉は、話される言葉とはちがって、すぐに消えてしまうことはありません。いつまでもあなたを待っていてくれます。

